

フランソワ・モーリャックの「蝮のからみあい」 における引用符について

上 條 光 子

Sur les guillemets chez *Le Noeud de Vipères* de François Mauriac

par

Mitsuko KAMIJO

フランソワ・モーリャックの1932年の傑作「蝮のからみあい」の中に、引用文・直接話法の文を囲む、特殊な名詞・固有名詞を囲むという従来の引用符とは異なる引用符があったのでこれをとりあげることにした。この考察では、引用符にどんな用法があるのかを調査し、特に特殊なものについては一つ一つを吟味しその意図の探求を試みることを目的とした。そこで引用符に囲まれた内容をまず文の構成上から検討すると奇妙な点に気付く。すなわち、名詞の場合、冠詞・所有形容詞・指示形容詞等を除いた単語のみに引用符が付けられているものが20個もあったこと。^(注1)動詞では、過去分詞の部分だけが引用符で囲まれているものが7個、さらに Je me faisais "du mauvais sang". (p.144) のように動詞句の一部が囲まれていたり、副詞では、 Elle était tout entière meublée en "ancien". (p.116) のように副詞句の一部が^(注2)囲まれていること。文では、述部のみが引用符で囲まれているものが2個あったこと。これらは何を意味するのかを考えると、引用符が一つの単位としての機能をもつことが考えられる。引用符が元来作者が読者に注意をむけさせたい時に用いる道具である以上作者が何を強調しようとして引用符を用いているかに注目する必要がある。そこで一つの単位としての機能をもつ引用符が付けられている語句の内容を意味の上から分析しながら作者の意図を考察していくと、次のような結果になった。

(表1)

引用符の付けられた語句の内容例	個数
固有名詞および固有名詞扱いのもの	3
語句自体をとりあげて問題にしている場合のもの	10
くだけた表現あるいは比喩的な表現として用いられている場合のもの	13
特別な意味を含ませて用いられている場合のもの	29

表1の最後の特別な意味を検討することにより、「蝮のからみあい」で作者の特に強調したい点を知ることが出来ると思われるので、ここではこの点のみを展開させる。29個の例では次の五種類の意味を読みとることが出来る。

(表2)

語句に含まれた意味例	個数
1) 主人公の気取りを思わせる語句	4
2) 主人公の蔑視を示す語句	5
3) 主人公の皮肉まじりの語句	7
4) 主人公・他の作中人物が重要視している語句	4
5) 主人公の耳に他の作中人物の口調が残っている語句	9

それぞれの展開を以下に示す。

1) の例

Ex. 1 Deux fois par semaine, un panier arrivait de la campagne : maman allait le moins possible "au boucher". (p.18)

あえて『肉屋へ』と言ったのも自分の家が金持ちであるという前の文脈から察して「肉屋へ行ける身分なんだが週に二度ずつ食糧の籠が届けられるので」と言いたい主人公の見栄が示されているようである。

Ex. 2 Il fallait lutter, le jeudi et le dimanche, pour me faire "prendre l'air". (p.18)

散歩するという意味で prendre l'air と言ったのは、文脈から戸外の空気にふれさせるといふ意味を出したかったからであろう。主人公を散歩に出すのにけんか腰になる位「外に出ることを惜しんで勉強した」という主人公の気取りを感じさせる。

Ex. 3 Non que je fusse laid, il me semble. Mes traits sont "réguliers" et Geneviève, mon portrait vivant, a été une belle jeune fille. (p.20)

生きうつしの娘が美しいのだから自分の顔もまんざらじゃないという気持ちと「一般にいう整った顔立ちといえ言えるのだろう」という気取ずかしさとが織りこまれた言葉ゆえに引用符で包み隠しているようだ。

Ex. 4 L'idée reconçue qu'elles cherchent toutes à s'assurer une position, me glaçait.(...) Toi, je t'avais "pensionnée". (p.55)

「女という女は境遇の保証を求めたがるんだから、私は妻に生活費を与えて彼女を安心させている」という主人公の自負心を示そうとした語句に引用符が付けられている。

以上の例では、主人公の周囲の者の基準にたっていわゆる「かっこいい」と思わせる言葉をわざと用いたことを示すために引用符が用いられている。

2) の例

Ex. 5 Moi, fils de paysans, et dont la mère avait "porté le foulard", épouser une demoiselle Fondaudège! (p.23)

絹のえり巻きをするのは田舎の婦人の普通の姿である。これを引用符で囲むことにより、百姓の伴である主人公の「田舎くさい母」に対するつらあてと同時に、都会と田舎というつり合わぬ関係をあざわらう冷笑とが示されている。

Ex. 6 Dans ton monde, un mari "accompagnait sa femme à la messe" : C'était la formule reçue. (p.36)

「夫が妻のお伴をしてミサに出るなんて、なんともみっともないことを！」と上流社会の上品ぶったかっこうのつかない慣例をせせらわらう主人公の気持ちが引用符をつけさせずにはおかなかったのであろう。

Ex. 7 Son vice qui était de trop aimer l'argent, elle me l'avait légué ;
j'avais cette passion dans le sang. (……) Je résistai à mon ambition
parce que je ne voulais pas renoncer à "gagner gros". (pp.51-52)

「たんともうける」ことが悪癖だとし自分の血にも流れている母からの金に対する執着をあきれさげすみながらもそれを諦め切れない自分にも蔑視がむけられている。

Ex. 8 :tu n'as pas voulu connaître cet "individu",—un homme ordinaire.
(p.74)

この individu は主人公の妻が自分の憎んでいるマリネットの婚約者のことまでも「あんなやつ」と見下しているその妻から見た表現である。こうすることにより逆にそういう妻を蔑視する主人公の気持ちを示している。

Ex. 9 Ah! faut il que je hâisse les autres, pour ne pas leur claquer la
porte au nez, à ces deux-là! Des "autres" aussi, ils ont peur.
(p.91)

ここでは二つの autres のうち後者の方に引用符が付けられていることから、「恐れるにおよばぬやつらなのに」という主人公の、他の身内に対する軽蔑を読みとることが出来る。

以上の例では、主人公が嘲笑とさげすみの意を含んでその語句を用いている時に引用符が付けられていた。

Ex. 10 Chaque jour, elle vivait dans l'attente de "l'heure du thermomètre".
(p.19)

「母の喜びも悲しみもひたすら私の体温表にかかっていた」と言っているように、検温の時間を楽しみにしている母の姿を見てありがたいと思いつつもそれだけに生きていることに反感を覚えた主人公が皮肉っぽくこの言葉を用いていることを示すために引用符が付けられている。

Ex. 11 Geneviève se débarrassait en hâte de ce qu'elle avait préparé. Il
s'agit bien du quart d'agent de change. (……) Je lui ai répondu que,
pour un garçon tel que son gendre, son "quart d'agent de change" ne
servirait jamais qu'à lui fournir des alibis. (p.46)

ジュヌヴィエーブにとって気になっていた仲買人の株という語句に引用符が付けられているのは「そう気にする程たいした役には立っていないではないか」と主人公がそんな彼女をからかっていることを示すためのようである。

Ex. 12 Je n'avais rien que cette consolation de "gagner gros", comme
l'épicier du coin. (p.53)

例7と同じ語句が引用符で囲まれているが、ここでは食料品屋のたんともうけるやり方を皮肉って引用符を付けたと考えられる。

Ex. 13 Trop scrupuleuse pour me diminuer à leurs yeux tu ne leur avait
pas caché qu'il fallait beaucoup prier pour "pauvre papa". (p.58)
子供たちの眼からかき消されないようにと自分のために祈ることを妻が子供らに強いるほど

『かわいそうな父親』である主人公が、あわれなる者だなあと苦笑しつつ自分自身を皮肉っていることを示すために引用符が付けられているように思われる。

Ex. 14 Si je ne l'ai pas appelé, c'est que nous demeurions persuadés qu'il s'agissait d'une simple grippe "qui s'était portée sur l'intestin".

(p. 73)

主人公が医者をやばなかった口実の中で、単なる風邪だとみなが思いこんでいたからだと言いつつも『ところが現実には腸チフスにまでなってしまった』と皮肉たっぷりのことをつけたしている。現実の皮肉を皮肉ってつけたされた句ゆえに引用符がつけられたものであろう。

Ex. 15 Il y a "les oeuvres",—les bonnes oeuvres sont des trappes qui en gloutissent tout. (p. 121)

tiret 以下で説明されているように、この事業とは慈善行為をさすものである。「今の自分には他人のことを思いやれない」という主人公にとって、今善業をするのは簡単だが心が伴わないからしない。一般の慈善事業に心が入っていない偽善的なものが多いことを皮肉ってこの語に引用符が付けられているようだ。

Ex. 16 Tout se passe sans trop de clisputes ; la terreur d'être "désavantagés" leur a fait choisir ce parti comique de partager les services complets de linge damassé et de verrerie. (p. 136)

主人公が滑けいなどと言っているように、『割りの悪い』思いをするのがいやさにそろいものまで分けるという彼らの物質欲をからかい皮肉ってこの語に引用符が付けられていると思われる。

以上の例では、主人公が他の作中人物をあるいは自分自身を茶化し皮肉ってその語句を用いていることを示す引用符がみられた。

4) の例

Ex. 17 Mon instinct était de repousser toute sympathie. (……) J'étais un enfant féroce pour qui prétendait m'aimer. J'avais horreur des "sentiments". (p. 19)

この sentiments にはあらゆる同情・共感・愛情といった精神的な動きに動かされるのを嫌った自分の子供の頃の頑固さをすなおに告白する気持ちがこめられていることがわかる。^(注4) 子供の頃は自分の内にある感情を無理に押し殺し否定しようとしていたが、大人になつての告白ではすべての愛の燃える中心なるものを求める感情が自分の内にあることを認めている。^(注5) すなわちここでは後者の祈りともいえる感情は含まないで一般にいうあらゆる感情なるものを一つ一つ自分の内に思いおこしてそれらを毛嫌いしていたと言っているようである。^(注6)

Ex. 18 J'allai à la terrasse. Je savais que Marinette me suivrait. Et en effet, j'entends sa voix essouff-flée : "Attendez-moi..." Elle avait mis autour de son cou un "boa". (p. 70)

マリネットがついてくることを予期していた主人公にとって、自分のあとを追って夜のテラスに出るためにマフラをつけてすでに準備していた彼女を見て「えたり」と思ったに違いない。この最後の語に引用符があることで主人公のその気持ちを守っているようである。主人公の予想を確認してくれるマフラに読者が眼をとめるよう引用符が付いている。

Ex. 19 Cette nuit, une suffocation m'a réveillé. (……) A peine la vigne a-

t-elle "passé fleur" ; la future récolte couvre le coteau. (……) Que m'importent à présent les récoltes? Je ne puis plus rien récolter au monde. (p.84)

この一節は主人公が自分の死を意識して書いている章の中で見られる。文脈からぶどうの収穫と自分の生涯とが重なっていることがわかる。この世の中からもはや何も刈りとるものはないと言っているように死を前にして『花を過ぎた』自分の一生をふり返っている主人公がさまざまな思いをこめてこの言葉を発していることを示そうとして引用符が付けられているように思われる。

Ex. 20 Mon cher oncle, je viens vous demander d'être juge entre maman et moi. Elle refuse de me confier le "journal" de grand-père; à l'entendre, (……) Je m'étonne plus encore de son empressement à me faire lire la dure lettre où vous avez commenté ce "journal"… (pp. 157-158)

これは、この小説の最後にあるジャニーヌが叔父のユベールにあてた手紙の一節である。この手紙には日記という語が引用符を付けないでほかに2回でてくる。それは、母によればとか母が言うにはとことわってあるように、ジャニーヌの母が単なる細かい日常的なことまで書き記したメモとしてこの言葉を使っている場合である。しかしジャニーヌにとっては、自分の信仰を立ちかえらせてくれた唯一の人であり、^(注7) お金のあるところ^(注8)に心のなかつたお祖父さんのことを証言してくれる人生記録としての大切な日記なのである。またモーリャック^(注9)にとっても「作家と作中人物」の中で述べているようにこの小説が主人公の回心記録であることを顕著に表わしているこの手紙の中で、日記が単なる日記帳ではなく主人公という人間の証言記録としての意味をもつ語ゆえにジャニーヌと同様、引用符を付けてその重要性を読者に知らせようとしていると考えられる。

以上の例では、主人公がその語句をある意味をこめて用いていることを示しその語句の重味を読者に伝えるために引用符が付けられていた。

5) の例

Ex. 21 Tu avais un couplet sur les vieilles familles paysannes" plus nobles que bien des nobles…"(p. 37)

主人公が妻の使っていた対句をそのまま形容詞句としてつけ加えることにより、彼女の『貴族の中の貴族』という貴族を誇る口ぶりを伝えている。

Ex. 22 Marinette tisait la langue aux volets clos de ta chambre, en épinglant à son amazone une rose trempée d'eau, "pas du tout pour veuve", disait-elle. (p. 67)

地の文に disait-elle と挿入されているように『ちっとも寡婦らしくない』というマリネットの口調を直接話法のようにそのまま伝えている。

Ex. 23 Il n'avait rien des Fondaudège, ce fils de Marinette, ce garçon aux yeux de jais, aux cheveux plantés bas et ramenés sur les tempes comme des "rouflaquettes" disait Hubert. (p. 79)

ユベールの『まき毛のひげ』という形容をそのまま伝えようとして引用符が付けられている。

Ex. 24 Son élégance provinciale contrastait avec la tenue sobre d'Hubert
"qui s'habille comme un Fondaudège", dit Isa. (p.112)

『フォンドージェ家の人間らしい身だしなみをしている』とってフォンドージェ家を誇るイザの口ぶりをそのまま引用した形容詞句に引用符を付けることにより彼女の口調を生き生きと伝えている。

以上は、地の文中に直接話法の文に挿入される *disait-elle* のような形で話し手を示し、その言葉を浮き上がらせている例であった。

Ex. 25 Le baron Philipot racontait partout qu' à Bagnères-de-Luchon, sa
petite belle-soeur s'était "toquée" d'un jeune homme d'ailleurs
charmant, (……), mais d'une origine obscure. (p.36)

フィリップ男爵の語った間接話法の文中にあって、特に『のぼせあがった』という俗っぽい彼らしい表現を直接話法のように伝えたいために引用符が付けられているようである。それにより「あんな家柄のいかがわしい男に義妹がまいてしまうと！」という男爵の気持ちをも読者に伝えようとしているようである。

Ex. 26 Parce qu'il se trouvait là, cette année où ta mère, en proie au
retour d'âge, s'était persuadée que tu n'étais pas "mariable", —parce
que tu ne voulais ni ne pouvais demeurer fille (……) (p.40)

妻の母の言い方をそのまま伝え『結婚の可能性のある』婚期の過ぎるのを憂え心配している彼女の気持ちを表わそうとしているようだ。

Ex. 27 J'i su depuis qu'elle m'accusait d'avoir, pendant ces quelques
secondes, "retourné" Janine et de m'être amusé "à lui mettre un tas
d'idées en tête". (p.148)

ジュヌヴィエーブの大げさな言い方が主人公の耳に浮かび『気持ちをひるがえ』『山ほどの思いをあこの頭につめこんで』という彼女らしい表現を直接話法に近く伝えようとして引用符がつけられたものと思われる。

Ex. 28 Il me répondit, tout en protestant qu'il ne partageait en rien l'opinion
de sa femme, que j'avais agi, selon elle, par malice, par vengeance,
peut-être par "méchanceté pure". (p.148)

selon elle とことわってあるように、彼女の言いぐさの中では引用符のつけられた『純粋な悪意』という表現が最も彼女の言いそうな口調として主人公の耳に残っていることを示しているし最も彼女らしいとり方として彼女の気持ちを読みとる主人公の気持ちをも示している。

以上の例では、主人公の耳に他の作中人物の声を直接話法でかかれたかのようによみがえらせて読者にきかせ、さらにはそれを言う人物の性格をも示そうとして引用符が用いられていた。

これまでのいずれの例にもいえることは、引用符がすべて主人公の心理の反映として付けられていることである。最後の5)の例においても主人公の耳に記憶に残るほど主人公の心に印象づけられた言葉だからである。

次に文に視点を移すと、引用符の別の用法を見ることが出来た。文を囲ったすべての例を種類に分けると次の表のようになる。

この表の中でモーリャックの作品に見られる特にかわった用法が下の16個の例である。引用符の付けられていない間接話法・自由間接話法が大部分の中でなぜ16個に付けられているのか

(表3)

引用符で囲まれた文の内容例	個数
引用文	10
tiret で導かれた直接話法の中の別の直接話法の文	6
直接話法の文	194
地の文, 間接話法, 自由間接話法の文中の一部	8
que 以下の間接話法, 不定詞句の間接話法, 自由間接話法	8

その意図を考察しながらそれぞれの例を以下に展開していくことにする。

Ex. 29 Des les premiers beaux-jours, “je repris le dessus”, comme disait ma mère. (p. 19)

母が言っていたようにと書かれているように“Tu reprends le dessus”という母の声を、「お前は健康をとりもどすよ」という母の言葉を裏にひめてそのなつかしい声と重なった表現であることを示そうとして地の文に引用符を挿入させて過去の直接話法を思わせている。

Ex. 30 Tu m'avais tout de suite averti d'une de tes exigences. “Dans l'intérêt de la bonne entente”, tu te refusais à faire ménage commun avec ma mère et même à habiter la même maison. (p. 30)

これは地の文に相手のせりふが引用符で囲まれて挿入された例である。主人公の母と同居するのを拒む妻の言いぐさを、「二人の仲がびったりゆくために」という口実をそのまま残すために、さらにこの場合相手の口調を借りることにより「そのために拒んだと言いたいんだらう」という主人公の皮肉をも示している点にも注目したい。

Ex. 31 Elle avait mis tous ses efforts à me maintenir dans un métier où, comme elle disait, “je gagnais gros”. (p. 51)

例29の場合と同様、この例でも『お前は、たんともうける』という母の言葉が、“Tu gagnes gros”という母のせりふが地の文に重なっているものである。

Ex. 32 ;tu allais le voir, une fois chaque hiver, dans ce collège aux environs de Bayonne; “Tu faisais ton devoir, puisque le père ne faisait pas le sien…” (p. 75)

「お父さんがお父さんらしくして下さらないのだから自分のことは自分でするのですよ」と妻が子供らによく言っているのをきいている主人公がその同じ調子を借りて妻に皮肉っぽく『父親が父親らしくしてやらないからあなたはあなたの義務を果たしたんでしょうが』という引用符付きのせりふを地の文に挿入させて主人公の妻に対する皮肉を示している。この点では例30と同じ用法である。

Ex. 33 J'entendis les vagues “bonssoirs” qu'ils lui adressèrent sans s'interrompre. (p. 95)

子供たちがその母にむかってなげたあいさつ『お休みなさい』という^{うわ}上の空の声をそのまま直接話法のように引用符を付けて伝えることにより、主人公が妻と同じ気持ちでその声をきいていることを示している。それは、主人公の妻への思いやりを表わすものである。

Ex. 34 Que pensent-ils de moi? Que j'ai été battu sans doute, que j'ai

cédé. "Ils m'ont eu". Pourtant, à chaque visite, ils me témoignent beaucoup de respect et de gratitude. (pp.136-137)

「彼らは私をまかした」と主人公が思っているなら次に *pourtant* がくるはずはない。これは「我々は彼をまかした」という子供らの思いを想像してあたかも自由間接話法かのように人称をかえてそのせりふを表わしたものである。すなわち、「やっつけた！」という気持ちが子供らにありながらも主人公に深い尊敬と感謝の念を示すと続く方が文の流れとして自然である。「彼らが自分のことをどう思っているのだろうか」という主人公の想像を発展させて出たせりふを引用符で囲うことにより“*Nous l'avons eu*”という子供らの気持ちを読者に伝えようとしたものである。

Ex. 35 -*Son beau-père est plus indulgent que toi, dis-je. Alfred répète souvent que Phili "n'est pas un mauvais drôle".* (p.133)

これは主人公の直接話法の中の間接話法で表わされたアルフレッドの言葉の一部が引用符で囲まれたものである。主人公はアルフレッドの言葉をはじめ間接話法で伝えながらその口調を「そんなに悪い奴ではない」という言い方を思い出しそれを直接的に伝えようとして引用符が付けられている。

Ex. 36 *Il se retourna pour me crier "de rapporter tout ça à la banque de France".* (p.83)

「あれをそっくりフランス銀行に納めるように」という不定詞句に引用符が付けられているのは、主人公に叫ぶロベールの直接話法の声をよみがえらせようという意図のためのものである。

Ex. 37 *Il a en dépôt une enveloppe sur laquelle j'ai écrit : "à brûler le jour de ma mort" et qui sera drûlée, j'en suis sûr, avec tout ce qu'elle contient.* (p.91)

「小生死亡の日に焼却すべきこと」という内容を伝えるのにセミコロンで十分であるのに引用符が付けられているのは、主人公が自分の死ぬ日のことを想像しその時の気持ちをこめてきっぱりとした口調で言っていることを示している。

Ex. 38 *Je crus discerner cette lueur dans ses yeux, lorsqu'elle croyait "m'avoir eu".* (pp.103-104)

イザが「私の心をとらえた」と思っているだろうと主人公が想像して書かれたせりふに引用符が付けられているという点で例34と同じ用例である。この不定詞句に引用符を付けることで“*l'avoir eu*”という彼女の気持ちを直接的に読者に伝えようとしているようだ。

Ex. 39 *Furieuse, elle protesta "qu'elle voudrait bien savoir qui était le plus égoïste des deux". Elle ajouta : -Bien sûr,* (p.133)

これはジュヌヴィエーブとユベールが言い争っている場面の一節である。彼女はユベールの言葉に対して初め間接話法でついで直接話法で反論している。しかしこの場合 *que* 以下の間接話法に引用符があるのはなぜであろうか。単なる間接話法では彼女のむっとした口調が伝えられないし、かといって直接話法では二人の争いに興味のなくなった主人公にとって『お兄様と私とどちらが利己主義だか知りたいものだわ』という内容そのものがはっきり出すぎる。そこで間接話法で内容を包みながらただ *furieuse* な点を残すためにつまりその口調を残すために引用符を付けた例といえよう。すなわち直接話法を囲む引用符が間接話法を囲むことにより

自由間接話法化しその持ち味をそのまま生かしている。この場合、間接話法からすぐ直接話法にうつるよりは、中に自由間接話法的話法を挿入した方が彼女の直接話法での強い調子への気持ちの高まりが感じられよう。

Ex. 40 Son frère l'interrompt, de ce ton âpre où je me reconnaissais, pour dire : "qu'elle y jetterait les autres aussi". (p.133)

例39から続く言い争いの場面で、ここでも「ついでにお前は人さまのことも火の中にほおりこむだろうよ」というユベールのせりふを間接話法で包みながら、主人公の過去に認められるようなとげのある口調で言ったという点だけを残そうとして引用符が付けられている。この場合 *que* がなければ完全なる自由間接話法になるがもしそうすると自分の過去の とげのある調子を現在恥かしく思っている主人公の気持ちが伝わらない。それゆえこの用法は間接話法と自由間接話法の中間的話法をつくり出しているといえよう。

Ex. 41 Elle m'observait d'un air méfiant et dit enfin "qu'elle ne voyait pas le rapport..." (p.152)

「^(注11)こんなに苦しい思いをせずにはどうしたらいいの」と彼女が自分に問うた晩のことを思い出す。から始まる章の一節がこの例である。注5で見たジャンヌの最後の手紙にもあるように苦しいことと神とか信仰とかが無関係だと言い切る彼女の心を再び神にむけさせた程主人公はこの『それとこれとは何の関係もないわ』という言葉にショックを感じ彼女に色々とさとしていった。この言葉が直接話法で言われる程鮮明さを必要としないのもこうした一つのかげりが主人公の心に残っていることを示そうとして間接話法に引用符をつけるにとどめたと思われる。

Ex. 42 Il parut surpris ; il trouvait "très joli" que je leur eusse assuré une rente régulière. "Il y en avait beaucoup qui n'en auraient pas fait autant". Il ajouta un mot horrible : "Du moment que vous n'étiez pas le premier" (.p.109)

アンダーラインの部分は、ロベールが主人公にしゃべっている言葉を自由間接話法で表わしたものである。しかも後半はさらに引用符が付けられている。すなわちこの例をよく見ると自由間接話法から引用符つき自由間接話法さらに直接話法と話法の移行に気付く。この過程によって、長年送金を断たなかったのはたいしたことだ、『多くの人はそれ程にしない』、それにしてもあなたはもうだんなでもないのに、といった調子でロベールの主人公に対するぬけぬけとした態度が次第に明らかにされている。彼の気持ちの高まりが示されていくのも引用符が一つの話法の道具となって働いているからである。このように自由間接話法の途中から引用符が付けられている場合、直接話法への橋渡しの意味をもって登場人物の気持ちの高まりを示そうと引用符が用いられている。と同時に主人公の心に視点をむけるとこの過程により主人公の心に次第に鮮明にされていく言葉とそれに伴う気持ちの記憶をも示していることがわかる。この場合もロベールのそれと同時に、主人公の心に *horrible* とうつる程彼の言葉が冷たさを伴って想い出されてくることが読みとれる。

Ex. 43 Je lui fis croire que j'avais loué une auto et que je rentrais à Calèse. Soudain, Janine dit : -Emmenez-moi, grand-père. Sa mère lui demanda si elle était folle ; il fallait qu'elle demeurât ici ; les hommes de loi avaient besoin d'elle. Et puis à Calèse, "le

chagrin la prendrait”.(p.147)

この例では、例42以上にはっきりと主人公の心を読みとることが出来る。アンダーラインの部分は、ジャンヌの母のせりふが自由間接話法で書かれたものである。ジャンヌが主人公に「私も連れてって」と頼むと彼女の母がまず間接話法でついで自由間接話法でそれをさえぎる。最後の引用符つき自由間接話法に至っては、主人公に対する彼女の挑戦ともとれそうな『気がふさぐだけじゃないの』というきつい言葉を突きつけている。彼にとって快よい記憶として残る程自分に一緒に連れてってと頼まれることがどんなに喜びであり嬉しいことだったか、その気持ちをきっぱりはねつけて自分につらくあたる娘に対する淋しさの頂点がこの引用符つき自由間接話法のせりふに表わされている。娘のこの最後の言葉が主人公の心の奥底にまでズシーンとこたえていることが引用符によってわかる。親子の間の愛の砂漠を示しているようだ。

Ex. 44 Elle se risqua enfin : “Tout ça n'avait rien à voir ensemble……elle n'aimait pas à mêler la religion avec ces hoses-là. Elle était pratiquante, mais justement elle avait horreur de ces rapprochements malsains. Elle remplissait tous ses devoirs.” Elle aurait dit, de la même voix, qu'elle payait ses contributions. (p.152)

これは、例41から続く場面で彼女に主人公が真の宗教について説いている過程の一部である。アンダーラインの部分は、『そういうことと宗教とを混同してはいけない。私達はお勤めさえ果たせばそれでいいのよ』というジャンヌのせりふを自由間接話法で表わしたものである。その同じ声で献金だって欠かさないとはいかぬと主人公は間接話法で失望の一部を示している。すなわち自由間接話法に引用符が付けられて続く言葉が間接話法の場合、話している内容そのものはすでに主人公の頭から遠のいていることを示している。そして逆に内容とは離れて主人公の彼女に対する深いあわれみの情が、見方を変えれば欺瞞的キリスト信者への批判の情が高まっていることを示そうとして単なる自由間接話法ではあきたらず引用符を用いたように思われる。間接話法が続くとき自由間接話法で表わされるのは一般的だが、この場合のように自由間接話法のもつ表面的な働きになお作中人物の内面を表わす働きをつけ加える時に引用符を用いてそれを表わそうとしているようである。

以上の文例から、他の話法に引用符が付けられている場合、話者の口調を残すという直接話法の持ち味を示すにとどまらず、主人公の心理の高まりをも示そうとする作者の意図が読みとれた。リップスの言うように会話の特に目立つ点を示す直接話法を囲むということで引用符がその話法の利点にあやかって心理的に最もきわだった点を示す働きをもつものとしてモーリャックがそれを用いていると言える。

「蝮のからみあい」のすべての引用符の例をその位置と内容とによって分類すると次の表の(表4)

内容 位置	固 名	有 詞	問 の	題 語	fam. fig.	特 別 語	小 計	引用文	文 の 部	対 話 分	小 計	合 計
地 の 文		2		9	11	24*	46	9	6*	0	15	61
直 接 話 法		1		1	0	0	2	6	0	194	200	202
間 接 話 法		0		0	1	5*	6	0	1*	6*	7	13
自 由 間 接 話 法		0		0	1	0	1	0	1*	2*	3	4
小 計		3		10	13	29	55	15	8	202	225	280

↑ 語句の場合

↑ 文の場合

ようになった。

この考察でとりあげたのが上の表の星印の例すべてである。すなわち 280個の中で地の文・間接話法・自由間接話法の中に用いられている45個の例が特殊な用法であった。作者が最も強調したい点に注意をむけさせるための一つの単位としての機能をもつ引用符の付けられた語句の内容から、表2で示したように気取り・軽蔑・皮肉・重要視・記憶に残った口調といった主人公の心理を表わそうとした作者の意図を読みとることが出来た。他の話法に引用符を挿入させることにより、直接話法のせりふをよみがえらせたり、主人公の心に最も痛く残っている点を示そうとする作者の意図を読みとることが出来た。すなわち、語句では主人公がその語句にひめた心理を、文では会話の中で主人公の心の奥底にひびいたせりふを作者が強調しようとして引用符を用いていることがわかった。以上から心理描写の深いといわれる「蝮のからみあい」において、モーリャックは主人公の深層心理を表わす技法の一つとして引用符を用いていると言えよう。

最後に彼の別の作品でもこのような引用符の用法が見られるのか、という点と彼と同時代のジードの作品にはどうであろうか、という点について補足しておく。第一の点では、1932年以前の作品にも以後の作品にもこの考察の最初に示したような冠詞類を除いた語句、あるいは過去分詞、あるいは間接話法の一部に引用符が付けられている例がいくつも見られたことから、引用符の中身を内容的に強調したいために一つの単位としての機能をもって引用符が用いられていること、間接話法を引用符で包んでいる例^(注14)や自由間接話法に引用符が付けられている例^(注15)が話者の口調を残したり主人公の心理的反映とみられる引用符の用法として用いられていることから、この考察で示したことが「蝮のからみあい」だけに言えることではないことがわかった。第二の点では、ジードは従来の用法以外では彼が内容的に強調したいことがらを引用符で囲っている位で、間接話法や自由間接話法に引用符が挿入されている例もなければ主人公の心理的反映を示す引用符の例もなかった。以上の点から、少なくともモーリャックは、引用符をそれが単なる記号としての道具としてだけでなく作品中の心理描写に重要な役割を果たすものとしても用いていると言えよう。特に全作品を通じて調査した結果、この考察でとりあげた「蝮のからみあい」においてこそ最も数多く最も顕著にその用法が見られたことを付加しておく。

<注>

1. qui font des "scènes", (p.31) les "tourtereaux", (p.32) ce ne serait pas un "littéraire" (p.80)
2. Je t'avais "pensionnée", (p.55) d'avoir "retourné" Janine, (p.148) etc.
3. Un mari "accompagnait sa femme à la messe" (p.36) Phili n'est pas un mauvais drôle" (p.133)
4. *Le Noeud de Vipères*, Grasset (1932), p.19
5. Ibid, p.55
6. Ibid, p.142
7. Ibid, p.158
8. Ibid, p.158
9. Ibid, p.159
10. *Le Romancier et ses parsonnages*, Hakusuisha, (1957), p.25

11. *Le Noeud de Vipères*, Grasset (1932), p.152
12. Ibid, p.147
13. M. Lips, *Le style indirect libre*, Payot, (1926), p.98
14. et il protesta que "le docteur demeurait seul juge". *Le baiser au Lépreux*, Grasset (1923), p.135
 Le fils Deguilhem se disait" que c'était à tout le moins un manque d'empressement".
Thérèse Desqueyroux, Grasset (1927), p.160
 elle répétait que"ça ferait un joli coco". *Le désert de l'amour*, Grasset (1925), p.21
 On disait à Bordeaux "qu'il avait Maria Gross pour la montre". Ibid, p.83
 Il savait que" le Bon Dieu n'y était pas", *Le Sagouin*, Plon (1951), p.97
15. "C'était dimanche, il aurait dû s'en douter, elle lui avait fait manquer deux taureaux"
 ...Ainsi songeait-il, *Le désers de l'amour*, p.75
 Elle habiterait l'hôtel, chercherait peut-être un appartement. Elle comptait suivre
 des cours, des conférences, des concerts, "reprendre son éducation par la base".
Thérèse Desqueyroux, p.171

<参 考 文 献>

- M. Grevisse, *Le Bon Usage*, Duculot, (1964)
 Eva Kushner, *Mauriac*, D-D-B, (1972)